考古学研究所アルカ提供

Archaeological Laboratory,Co.,Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.251
2024.8.1

＊考古学研究所（株）アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

心に残る先学の人生記録
―読書日記から―
大村　裕

第41回

赤星直忠『穴の考古学』

（学生社　1970年）

赤星直忠博士（1902～1991）は主に初中等学校の教員等の傍ら、郷土の横須賀を拠点に、神奈川県域を主なフィールドにして多大な業績を挙げた偉大な学者である。博士の指導を受けて優れた考古学研究者に成長した人は、岡本勇をはじめとして数多く存在する。

赤星の研究領域は、早期縄紋土器の編年的研究、横穴墓の研究、「やぐら」（中世鎌倉の武士階級の墳墓）の研究、海蝕洞窟の研究、古代寺院址の研究、中世城郭址の研究、近世末の「台場」の研究、近代の東京湾要塞の研究など広範囲におよんでいる。あまりにも研究領域が広いので、何も知らない人には、「広く、浅く」研究するアマチュア学徒と思われかねないのであるが、その研究の実際を覗いたら驚嘆するであろう。縄紋式では、「誰彼の別なく酷評していた」先史考古学の権威・山内清男が、赤星だけは高く評価していたと角田文衛が証言している（『画竜点睛』80頁）。「珍品」主体に遺物採取する時代に、赤星の各遺跡の調査資料は小破片までよく採集されてあって、型式の調査には非常に好都合であったという（山内「繊維土器について　追加第三」『史前学雑誌』2巻3号　1930年）。また横穴墓の研究では、これの編年的研究を試み、学位（博士）請求論文に仕上げているのである。

さて、標記の書籍は、赤星が携わった縄紋式関係遺跡、横穴墓、やぐら、海蝕洞窟の調査成果の紹介が主体となっているが、冒頭には彼の職業遍歴等が叙述されている。これに、彼の講演録（「私と考古学の思い出」『横須賀考古学会年報』27　1987年）や横須賀考古学会「赤星直忠の学問とその生きた時代」（2003年）等を参照して彼の半生を振り返ってみたい。

赤星直忠は神奈川県三浦郡横須賀町（現横須賀市）おいて明治35（1902）年に出生。大正10（1921）年に横須賀中学校（旧制）を卒業後、横須賀町の豊島小学校の代用教員となる。小学校教員になるための特別の教育を受けていたわけではないので、オルガンの練習は毎日放課後に取り組み、発声と音程の練習は同僚の女性の音楽教師から手ほどきを受けている。授業の準備も熱心にやったであろう。それである時、同僚の老教員から「特別に勉強したり、他の者より勝れようしたりすると、何とかかとか言われる」と注意を受けたという。

さて、赤星が考古学に関心を持ったのは、旧制中学時代だった。この時期、鳥居龍蔵の動向記事を盛んに切り抜いていたと述懐している。中学卒業後も、鳥居が國學院大學で行なった講演を、学生に混じって聴いている。奇しくもそれは、後年赤星の研究テーマの一つとなる海蝕洞窟遺跡の話であったらしい。そして本格的に遺跡・遺物に接して考古学研究に打ち込む切掛けとなったのは、勤務校近くの崖に、宅造で露出した横穴墓群の調査を手掛けたことであった。かねてから考古学に関心のあった赤星は、何度も何度もここに通って「一穴一穴寸法を測って図を作ったり、写真をとったりした」という。これ以後、日曜日には必ず握り飯を持って三浦半島のどこかへ出かけ、土器や石器を拾って帰っている。この過程で茅山貝塚や吉井城山貝塚などを発見している。大正11（1922）年には横須賀重砲兵聯隊に一年志願兵として入隊。ここで演習中に著名な田戸遺跡を発見する。この遺跡は後年、山内清男と共同発掘している。おそらく、山内一流の精密な分層発掘の手法をここで学んだであろう。しかし報告書（「横須賀市田戸先史時代遺蹟調査」『史前学雑誌』7巻6号　1935年）では、山内の主張（上下層に型式差がある）を紹介する一方、自らは「上下層にて差異は認めない」と明記している。謙虚な赤星ではあったが、先史考古学の泰斗である山内の主張に一歩も引かず、自分の所見を大事にする姿勢は見事である。

戦前の小学校では、代用教員と師範学校出の教員の間の差別はひどかったと言われている。負けず嫌いの赤星にはそれは耐え難いことであったろう。それで校長の勧めもあって赤星は鎌倉にあった神奈川県師範学校本科二部に入学する（大正14/1925年）。彼はここでも周辺を歩き回り、縄紋後期の称名寺貝塚や早期の三戸遺跡を巡検したほか、鎌倉に分布が集中している「やぐら」や、古瓦の出土地を調査して回っている。「やぐら」や古瓦については、帝室博物館（現在の東京国立博物館）の関係者（高橋健自・後藤守一・石田茂作）に指導を受けた。この間、高橋からは京都帝国大学考古学教室の副手や帝室博物館の職員になることを勧められたという。赤星は諸般の理由からこれらの就職口を断っているが、同じ頃（大正13/1924年）、帝室博物館に就職することを熱望していた森本六爾は向こうから断られている。人柄が人選に影響したのかもしれない。向こう意気の強い森本に対し、赤星は年下の森本にも「先生」と敬称をつけるほどの謙虚さがあったのである。

最後に赤星の、山内清男にも森本六爾にもない最大の長所を指摘してこの稿を終える。赤星は山内ほどの頭脳の鋭さはないものの、教育者としての資質と「縁の下の力持ち」に甘んじる忍耐力を存分に持っていた。「鎌倉史跡めぐりの会」の記録係を長く担当するだけでなく、戦後は同好の仲間や中高校生を糾合して横須賀考古学会を結成し、長年主宰している。感服するのは、後進が成長すると、それが自分の主要研究テーマであっても、彼らに委ねるという姿勢を堅持していることである。一例を挙げれば、早期縄紋土器の編年に多大な成果を挙げた岡本勇の背中を押し続けたのは、赤星であったのである。現在も横須賀考古学会が存続しているのは、赤星の「人を育てる」という姿勢が大きく力になっているものと想像する。さらに、赤星の収集資料は、横須賀市自然・人文博物館、赤星直忠博士文化財資料館、神奈川県立歴史博物館等に大事に保管され、多くの人々が活用する基盤が整備されているが、これは赤星が生前から収集資料を私蔵することなく、それらを研究・教育に資することを配慮していたからに他ならない。その謙虚で誠実な人柄に、尊敬の念が一層深くなるのである。

（千葉毅氏、平田健氏から頂戴した赤星関係の目録・展示図録を参照しました）

※巻頭連載は隔月です。次回は鈴木正博さんです。

目　次

■心に残る先学の人生記録 ―読書日記から―（第41回）　大村　裕 …1
■考古学の履歴書 考古学とともに歩む（第16回）　山本暉久 …2
■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト（第243回）　岡田壮平 …3
■考古学者の書棚「馬の考古学」　三田日向乃 …4

考 古学の履歴書

考古学とともに歩む（第16回）

山本　暉久

16. 大学院での考古学 その5
－修士論文の取り組みと就職へ－

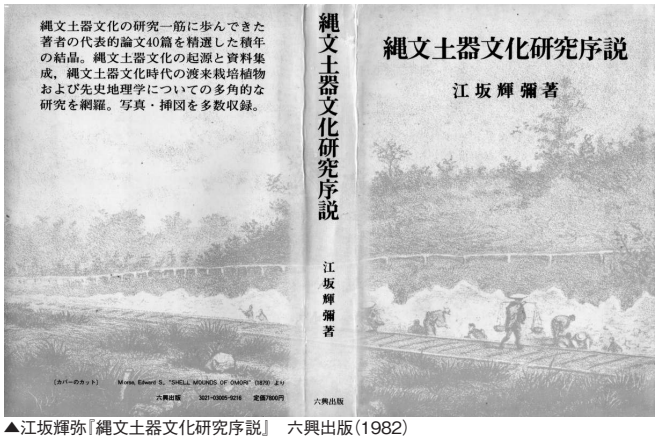
エジプト調査から帰国した1972（昭和47）年4月、大学院修士課程は3年目を迎えた。エジプト調査に参加した関係で、修士課程を2年間で終えることができず、自動的に留年することとなった。この時点で将来的になにか展望があるわけではなかったが、ともかく、この一年間で、修士論文をまとめあげて修士号を取得し、大学での8年間（学部卒業して一年間の浪人時期を含めて）を終えようと思ったのである。正直、文学部キャンパスのスロープを一人歩んでいる時、いったいこの先どうなるのだろうかという将来に対する不安な気持ちを抱いたことは否めなかった。博士課程へと進学することも考えなかったわけでもなかったが、早稲田大学大学院文学研究科では、当時、考古学で博士課程に進学することは難しく、たとえ進学しても将来的展望はなく、いたずらに歳を重ねるだけなので、修士課程で大学生活を終えようと決意した。いささか暗い気持ちというか高揚感のない一年の始まりでもあった。

さて、修士論文をどのような内容とするかについては、学部卒業論文で扱った縄文文化成立過程の研究成果を受け継ぐことに決めていたが、縄文文化が成立した段階の様相について取り組むこととし、とくに、南関東に分布の中心をもつ早期前葉（草創期後半）撚糸文土器群と西日本から甲信に分布の中心をもつ押型文土器群の関係について論ずることとした。この二つの土器群は分布の中心部の違いがあるものの、撚糸文土器が、縄や絡条体を回転施文し、押型文土器は、軸棒に山形や楕円形、市松状の文様を彫刻し、回転施文するという、原体は異なるものの、ともに回転施文するという共通性を有しており、その編年関係、とくに両者の出現過程が問題とされてきた。江坂輝弥先生は、縄文文化成立過程を考察するなかで、押型文土器に「回転押捺文土器」なる名称を与えたことでよく知られていた（挿図参照）。この時点で撚糸文土器群が押型文土器群に先行して成立するという編年観が主流を占め、今日的にもその解釈が続いているのであるが、原体は異なるものの、ともに回転施文するという共通性を評価して、編年観を再検討してみようと思ったのである。そこで、修士論文のタイトルを『列島における初源文化の研究－回転押捺文系土器群の展開に関する一考察－』とし、撚糸文土器、押型文土器の両者を江坂先生の解釈を拡大して「回転押捺文系土器群」と総称することとした。

研究史、事例の集成、編年関係を中心に扱ったものであるが、結論的には、満足のいくものではなかった。それは、そもそも立論の基盤を土器型式編年論に置いたことへの限界を感じたことからであった。土器論を展開する場合、いうまでもなく「資料」（当該の土器）を実際に分析しなければならない。しかし、手持ちの資料があるわけではないので、各地に出かけて実物資料見学する必要があった。いうまでもなく、考古学の基盤は、「考古資料」の分析にあるわけで、だから資料を得るために遺跡の発掘が行われるのである。いまでは、開発に伴う「記録保存」という調査がここ何十年の間主流を占め、本来の考古学の基礎たるべき、「資料」の収集という目的があいまいにされてしまっているのが現状となってしまった。それはともかくとして、手持ちの資料があるわけではなく、資料見学にとどまっている現状を歯がゆく感じてしまったのである。すなわち、モノ（考古資料）がないとどうしようもない。いくら資料を見学しても、限界があるという結論に陥ってしまうこととなった。それが、土器型式編年研究に限界を感じた理由であった。そんな経緯はあったが、なんとか修士論文を完成して、提出することができたのが、1973（昭和48）年2月初旬であった。

さて、3月に修士論文の口頭試問を終え、大学院修了が間近となったが、その後の進路は不明確のままで変わりはなかった。なにかとくに就職活動をしてきたわけではないので、このまま無職のまま卒業することになってしまうかと危惧していたのだが、岡田威夫先輩から、神奈川県教育委員会の特別採用試験の募集があることを知らされ、受験を勧められた。ちょうどこのころは、全国各地の自治体（教育委員会）が開発事業、とくに公共事業に伴う埋蔵文化財の調査、いわゆる「記録保存」調査に対応するため、大学で考古学を専攻した者を、特別枠の試験を行い採用し始めた時期でもあった。神奈川県教育委員会が募集したのは、県の上級公務員（「一般事務職」）として採用するもので、とくに専門職としての位置づけではなく、ほかの上級公務員の一般事務職と変わりのないものであった。そこでほかになにか当てがあるわけでもなかったので受験することとしたのである。

3月に行われた試験は、まず筆記試験として、ほかの公務員試験と同様の一般教養試験と考古学に関する専門試験であった。10名以上の受験者があったと思うが、この筆記試験をパスして面接試験に進み、なんとか合格することができた。合格者は、私と、岡本孝之（慶應義塾大学）と中田　英（かながわ考古学財団）の3名であった。当時、神奈川県は、教育委員会の事務組織として、神奈川県教育庁があり、その生涯学習部に新に「文化財保護課」が設立されたばかりで、埋蔵文化財を担当する専門職員もまだ少なく、鈴木保彦（日本大学芸術学部）、白石浩之（愛知学院大学）らがすでに在籍していた。かくして、公務員人生が始まることとなった。



▲江坂輝弥『縄文土器文化研究序説』　六興出版（1982）

略歴

1947年3月	新潟県東蒲原郡鹿瀬町（現・阿賀町）生
1965年4月	早稲田大学第一文学部史学科國史専修
1970年4月	早稲田大学大学院文学研究科修士課程
1973年4月	神奈川県教育庁社会教育部文化財保護課
1978年5月	日本考古学協会員
1985年4月	神奈川県立埋蔵文化財センター
1990年4月～1998年3月	早稲田大学第一文学部非常勤講師
1997年4月	財団法人かながわ考古学財団
2001年4月～2002年3月	昭和女子大学・同大学院非常勤講師
2001年11月	早稲田大学大学院文学研究科　博士（文学）
2002年4月	昭和女子大学大学院生活機構研究科教授
2003年10月	第4回宮坂英弐記念 尖石縄文文化賞受賞
2010年9月～2017年3月	駒澤大学大学院人文科学研究科非常勤講師
2017年3月	昭和女子大学定年退職・名誉教授　　現在に至る

隔月連載です。次回は工楽善通先生です。

リレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 243

田丸城跡 ～三重県度会郡玉城町

岡田　壮平

はじめに

今回紹介する遺跡は三重県度会郡玉城町に所在する田丸城跡です。玉城町の中ほどに位置し、標高約60mの田辺丘陵に立地し、昭和28年5月7日に三重県指定史跡となりました。玉城町内には田丸城を中心として、旧石器時代から近世に至るまで400を超える遺跡が見つかっており、古くからこの地域で人々が生活を営んでいたことが分かります。また、現在においても田丸城内には、玉城中学校や玉城町役場などが所在し町の中心となっています。

田丸城の変革

田丸城は延元元年（1336）、後醍醐天皇を吉野に迎えようと、伊勢に下った北畠親房・顕信親子により南朝方の拠点として築かれた城塞がはじまりです。このころの田丸城がどのような形であったのかを詳しく知ることができる資料はまだ見つかっていませんが、いわゆる土塁や切岸などを持つ中世城館であったと考えられます。その後、天正3年（1575）の織田信長の伊勢侵攻の結果、北畠家の乗っ取りを目的として織田信雄が養子となり、田丸城を居城としました。この時、田丸城は石垣や天守を持つ近世城郭へと生まれ変わりました。天正８年（1580）に田丸城は放火により天守ともども焼失し、信雄は松ヶ島城へと移りました。その後は、田丸氏、稲葉氏、藤堂氏の支配となりますが、元和5年（1619）に紀州徳川藩の所領となり、明治維新までの間、久野氏が8代にわたり城代家老となりました。

現在田丸城は城跡として石垣や土塁、堀などを見ることができます。また、城内にあった建物は廃城の際にほとんど取り壊されましたが、一部払い下げを受けて移築され、残っていた三の丸奥書院や富士見門が再度城内に移築されています。

田丸城跡の整備

前述の通り、田丸城は昭和28年5月7日、三重県指定史跡となっています。そして、令和3年より5年間をめどに国史跡化を目指し、現在整備などを進めているところです。

しかし、長年の雨風などによる劣化も相まって、城内の石垣が大変脆くなっており、座屈している石垣や築石が外れてしまっている石垣もあります。また、最近では平成29年の台風によって石垣の崩落も起こっています。崩落した石垣を修復するにあたって、重要なものは崩落前の石垣がどのように積まれていたかの記録になります。その記録としてよく使われるのは、石垣カルテになります。田丸城では現存している石垣のカルテを平成26年度と27年度にかけて作成しました。このときに作成したカルテは、石垣の概要や立面図、危険度などが記録されています。この記録をもとに、石垣の修復や積み直しを行います。また、この石垣カルテについても数年おきに記録を更新しています。

▲Model 1：平成29年崩落石垣

文化財とデジタル技術

近年、遺跡の記録などにデジタル技術を用いた方法が増えてきています。この中でも個人的に石垣のデジタルによる記録、3Dでの記録を行っています。3Dで立体的に記録を残すことで、石垣の現状を分かりやすく記録することができます。今まで玉城町で石垣カルテを作成するときには測量による記録であったので規模が大きく、取りたいと思ったときにすぐ取ることは中々困難でした。そのため、現在は個人での記録作成でありますが、ドローンやスマートフォンで手軽に3Dを作成することができるようになり、石垣の傾き具合や間詰石の流出具合など現状の記録も容易になりました。また、解説する際にも上からの形状や高所の様子といった地面からでは分かり辛いものでも俯瞰で見ることができるようになり、イメージを伝えやすくなりました。

現在、私が使っている方法は多方向から撮影した写真データを合成し、3Dを作成するフォトグラメトリという技術とLiDAR搭載のスマートフォンによる簡易的な記録方法ですが、今後さらに詳細なデータを取得できる技術を使うことで、報告書やデジタルアーカイブの作成、資料館での展示にも活用していこうと考えています。また、玉城町内には田丸城跡以外にも様々な遺跡や建造物などがあります。これらの遺跡や建造物で当町において問題になっているのが、建造物を管理できる人がいなくなったことでの取壊しです。こういった取壊し予定の建造物についても3Dにて記録することで資料として残せればと考えています。

◀Model 2：二の丸虎口
※俯瞰で見ることで構造が分かりやすい

◀Model 3：三の丸石垣
※樹根が石垣に悪影響を与えている

当町の規模で文化財担当職員を増やすことは困難で、こういったところでもデジタル技術を使い業務の簡略化を行い、それぞれの業務を効率化していくことが現状の当町の体制では必要になると感じています。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは水谷侃司さんです。

考 古学者の書棚

「馬の考古学」

青柳泰介・諫早直人・菊池大樹・中野咲・深澤敦仁・丸山真史 編／雄山閣(2019) ―――― 三田 日向乃

はじめに

馬は『魏志倭人伝』に「牛馬なし」と記されるとおり元々日本列島に生息しない生き物であり、古墳時代中期ごろから馬匹生産方法と共に馬自体も渡来し、日本列島に急速な広がりをみせた。

大学のゼミナール選択では土生田純之先生の講義そして、発掘調査に参加して考古学を選択するのに時間はかからなかったが、肝心の研究内容について決めかねていた。このような中で、2年次に履修した「古墳からみた国家形成」という授業内で馬の供儀について取り扱われ、頭を切断する行為が行われていたことを知り衝撃を受けた。結果として、現在も古墳時代の馬文化の研究をしている。

今回紹介する『馬の考古学』は40人の執筆者からなる26本の論考と17本のコラムによって構成され、馬そしてそれを取り巻く要素、社会背景などについて書かれる。本書は馬の研究をするにあたり考慮すべき事象について論じられまた、自身の研究の基礎となった著書であることから、今一度振り返りたいと思い選ばせていただいた。

本書の内容

本書はⅠ～Ⅵ章で構成され、日本列島を中心とした馬文化の受容について遺物・遺構そして文献史料から論じられる。Ⅰ章は馬の導入、そして導入期における日朝間の情勢について主に馬具・渡来系文物・倭系文物・石室を取り扱いながら日本列島における馬の導入を馬の運搬方法も含め考察される。また、畿内における牧と馬具製作工房について示唆される。さらに、上記では日朝と一括りにしたが、実際は百済・新羅・伽耶諸国といった地域ごとの交渉がなされていたことが考古資料から概観される。

Ⅱ章では東アジアにおける馬文化の考察がされる。主に中国大陸・朝鮮半島における馬の受容について馬匹生産のみならず、馬を使用した供儀について論じられる。また、古代中国において、地域によって馬を用いた供儀の方法が異なることを理解することができる。さらに、馬車と騎馬についても言及され中国大陸・朝鮮半島北部と朝鮮半島南部・日本列島で採用されたものが異なることが簡潔にまとめられる。

Ⅲ章・Ⅳ章では畿内・東国における馬文化の受容について分析される。馬の飼育には制御する馬具や、飼育するために塩が必要になってくる。そこで、鍛冶具や製塩の手工業生産について論じられ、相互に関係しあっていることを示唆している。Ⅳ章では東国(群馬・長野、東海・南東北)における馬の導入について遺構・遺物から検討される。特にこれまで、馬の生産地として群馬県・長野県内などが想定されてきたが、近年の発掘調査結果により東海地方において生産地の可能性が指摘される。また、南東北において初期馬具や初期須恵器が出土したことから当地域においても早い段階で渡来系文物がもたらされた事が書かれる。

Ⅴ章は化学分析を用いた手法について述べられる。これまでの馬文化研究は馬具研究が主であったが、動物考古的視点そして化学分析を行うことで年代や馬の産地を推定するに至れることを指摘される。

Ⅵ章は鍛冶・製塩に加え搬入土器について論じられる。鍛冶・製塩は上記でも述べたように馬匹生産に必要な要素である。特に本章内では鍛冶は群馬県を中心とした鍛冶遺構について取り上げられ、地方における馬具生産について示唆される。また、列島における塩生産について西日本を中心とした製塩土器及び山間部の塩泉が存在することが書かれる。さらに、古墳時代において土器は地域の様相を示すものであると同時に地域間交流を伺うことができる資料の一つでもある。

本書の内容を簡潔にまとめたが、コラムの内容を含めるとさらに多くの馬に関連する事象が書かれる。

以下は私の個人的な意見になるが、古墳時代の馬文化研究は多様な視点を持つことができると考える。まず、マクロな視点の研究である。本書でも述べられているが馬は中国→朝鮮半島→日本列島という経路を辿っており、それぞれの地域で変化を遂げているため、東アジアという大きな枠で研究することが肝要となる。また、馬に関連する要素は鍛冶・塩といった技術のみならず、人々の交流を古墳の石室構造や土器から伺うことが可能な点である。さらに、本書内に記載されるストロンチウム同位体比から畿内で出土した馬が東国で飼育されたことが判明した。そのため、東国における対畿内の関係性を考慮する一つの材料となると考えられる。そうしたことから私は馬文化研究の意義を見出している。

おわりに

古墳時代の馬文化は日本列島における馬文化の受容期でもあり、東アジアにおける馬文化の最終地点であるともいえる。そして、伝播する過程で変化を遂げていることが本書から読み取ることができる。また、馬が導入されたことにより儀礼つまり、人々の精神といったソフトな面にも変化をみせことが分かる。

こうした馬文化の研究は馬具・遺存体を中心に様々な研究と相互に関係するものであることを理解していただけたらと思う。

話は変わるが、今日において馬は馴染みのある動物と言えないかもしれないが、絵馬や精霊馬といった生活の場で馬を題材にしたものは息づいている。現代と古墳時代が直接リンクするものでないが、列島の馬文化の始まりを知る機会そして、生活の中にいる馬を探してみるきっかけになっていただけたら幸いである。

アルカ通信　No.251

発行日　2024年8月1日
企　画　角張淳一(故人)
発　行　考古学研究所（株)アルカ
〒384-0801 長野県小諸市甲49-15　TEL：0267-25-0299
aruka@aruka.co.jp　URL：http://www.aruka.co.jp